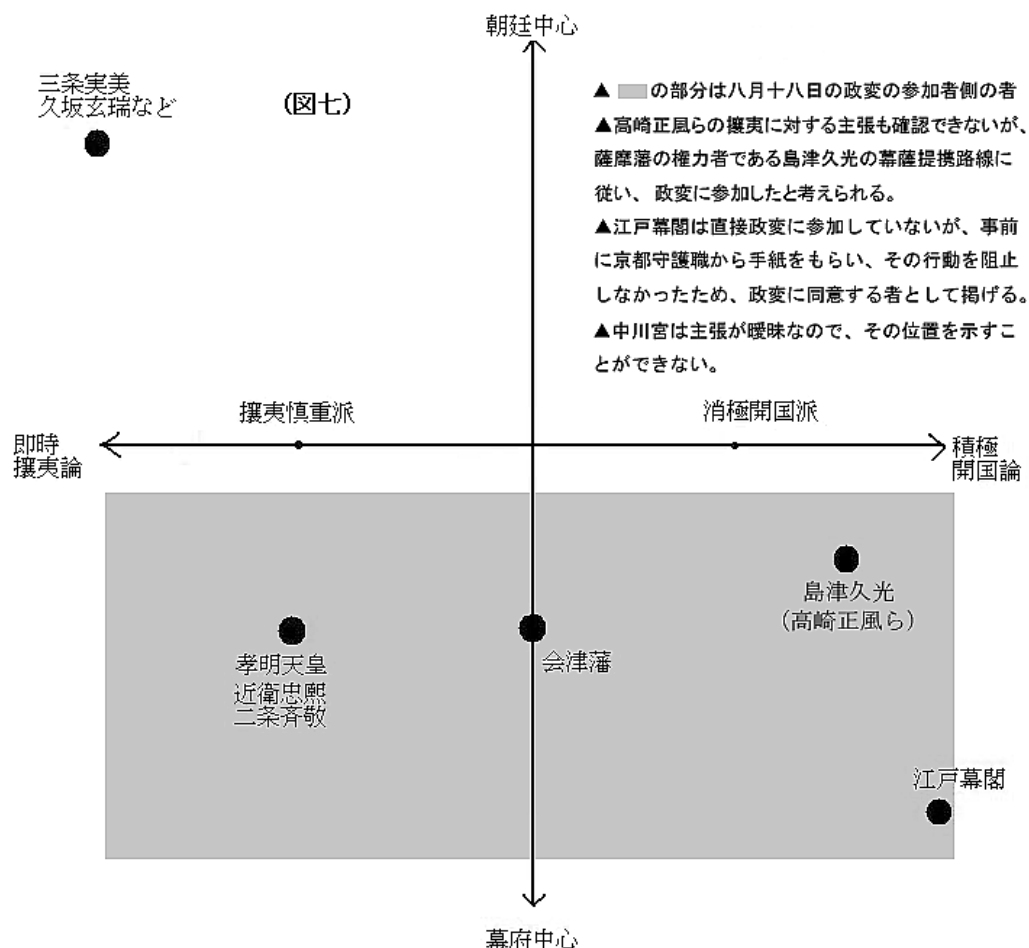


第五章 結論

第三章と第四章において、ゲーム理論に基づいて政変の参加者たちの動機を考察し、彼らによる八月十八日の政変の準備ないし政変行動について述べた。その結果、いわゆる八月十八日の政変は、薩摩藩主導の八月十六日の政変未遂と、孝明天皇・近衛忠熙ら上層公家及び会津藩の提携によって成功させた八月十八日の政変という二つの段階があったことがわかる。そして、従来の研究では武力を薩摩藩に利用されたに過ぎないと見られてきた会津藩は、八月十八日の政変に自発的に参加し、薩摩藩よりも政変の中心にあったことが確かめられた。これをふまえて、本章においては、当時の中央政局における八月十八日の政変の関係者の位置づけを分析することによって、八月十八日の政変の本質と意義を明らかにしたい。



第二章で述べたように、幕末の政争は、当時の中央政局に重きを成した政治勢力や中心人物が「攘夷一開国」と「天皇中心一幕府中心」という二つの対立軸の上で、自分の位置を探す過程の中で起きたことである。その図形の上に八月十八日の政変の関係者を表記すると、図七のようである。

原口清「幕末政局の一考察—文久・元治期について—」によると、八月十八日の政変当時の政局は、「大政委任的公武合体路線が攘夷慎重路線と結合」し、「王政復古的公武合体路線と即今攘夷路線と結合」し、この二つの勢力が「互いに主導権を競う」ものであり、「この過程は、対外政策上の対立が政争の主要な側面であり、国内体制上の問題は副次的なものとなる」と指摘している。³¹⁵ しかしながら、図七で示したように、八月十八日の政変の参加者或いはそれらと関係するものは、攘夷・開国に関係せず、幕府中心に国政を運営する側に散在している。一方、政変で排除された長州藩や三条実美らは、朝廷中心に国政を運営する側にある。つまり、八月十八日の政変は、対外政策上の対立によって生み出されたものではなく、国内体制上の対立によって勃発したもので、その結果、大政委任的公武合体派が勝利を収めた。これが文久三年（1863）八月十八日の政変の本質であったといえよう。

前述したように、先行研究ではこの政変を薩摩藩の主導で成功させたと言われた。したがって、政変後に上京した島津久光は孝明天皇から深く信頼され、政局における発言権が大きかったと言われている。ところが、『伊達宗城在京日記』に記された高崎正風の話によると、彼ら薩摩藩士は八月十六日に政変を行うつもりであり、それが未遂に終わったため、失望したあげく、酒を飲みに行った。後続の行動を全く考えず、政変計画をあきらめたというこの行動は、政変の主謀者にふさわしくない行為であり、この時点で薩摩が八月十八日の政変の主役からはずれた。それゆえ、図六ノ一で示したように、この政変を通して会津藩＝幕府勢力と朝廷との距離が大きく縮められたが、薩摩藩は姉小路公知暗殺事件の嫌疑が晴れただけで、ヘゲモニーを握り損ねたのである。

薩摩藩が八月十六日に脱落したにもかかわらず、十八日の政変は会津藩の力を頼って成功した。『京都守護職始末』によると、会津藩はその後、伝奏の通知がなくても直接参内できるようになった。会津藩が武家不入権を持つ公家の縄張りに自由に踏み込むことができるようになったのは、孝明天皇の厚い信任がバックにある。しかし、孝明天皇は八月十八日の政変で一人勝ちとなった幕府の勢力の拡大を恐れ、図六ノ二で示したように、十月に上京した島津久光に手紙を出し、今回は薩摩藩を利用して幕府の勢力

³¹⁵ 原口清、『幕末中央政局の動向』、p101～102。

を抑えようとした。そこで、島津久光は参預会議において、諸藩会議を目指す公武合体路線を通そうとしたが、結局、一会桑体制の形成によって、幕府主導の公武合体路線が押し進められた。こうして、薩摩藩が二度もヘゲモニーを握り損ねたのは、八月十八日の政変における両藩のポジションの違いを証明している。このように、中央政局において薩摩藩が劣勢に立つことになったことから、薩長同盟の契機が生まれたのではないだろうか。

つまり、図七からもわかるように、この政変の参加者は国内体制に関する「天皇中心—幕府中心」の対立軸の同じ側にいたため、八月十八日の政変では結束したが、対外政策に関する「攘夷—開国」の対立軸において位置がバラバラだったので、政変後は結束力がなくなる。元治・慶応年間(1864～1867)になると、会津藩＝幕府の一人勝ちに不満だった薩摩藩は、やがて朝廷中心に国政を運営する側に移動する。一方、即時攘夷論を唱えた長州藩は、文久三年(1863)下関で外国船を砲撃したせいで、翌元治元年(1864)には米・仏・蘭・英四国連合艦隊が下関に殺到し、報復砲撃を受けた。これによって長州藩は武力攘夷の不可能を認識し、開国論に傾き始めた。このため、薩・長両藩は図七の右上の「朝廷中心—開国」の部分に移動し、最後には同盟を結び、倒幕運動の中心となった。言い換えれば、八月十八日の政変を通して会津藩＝幕府が独り勝ちをしたことが、薩長同盟の原因を作り、明治維新の遠因ともなったといえよう。

以上述べたように、八月十八日の政変について、以下の三点にまとめて置きたい。

第一、八月十八日の政変は薩摩藩の政変計画に基づいて、八月十六日の未遂を経て十八日に成功したとされてきた。しかし、十六日の政変未遂と十八日の政変行動は連続したものではなく、薩摩藩は十六日の失敗で脱落し、十八日の政変は上層公家と会津藩の働きで成功した。そのため、薩摩藩は政変後、中央政局における主導権を手に入れることができなかった。

第二、八月十八日の政変は対外方針に関する立場を問わず、大政委任に同意したものたちによって行われたものであり、その結果、王政復古を唱える長州藩の勢力が京都から追い出された。これが本政変の本質である。

第三、八月十八日の政変における会津藩の働きによって、政変後、中央政局において幕府の勢力が強まる一方であった。薩摩藩は諸侯会議を唱えてそれと対抗したが、その努力は実らなかった。結局、薩摩藩は長州藩と提携し、倒幕運動に走り、明治維新に繋がる。これが本政変の意義である。

なお、八月十八日の政変について、兵力を動員する前の計画段階に関す

る文献が少ない³¹⁶ため、その部分において確実な行動が見られない。公家と会津藩の史料のさらなる発掘と分析は、今後の課題としたい。



³¹⁶ 会津藩の史料の欠損は序論で述べた通りであるが、公家の史料は私蔵が多く、未刊のものも多かったため、容易に手に入ることができない。そして、会津藩の史料と同じように、八月十八日の政変に関する部分が欠損している。たとえば、『二条家日記』は文久九月一日以降のもので、『忠熙公記』は文久年間の部分がなく、『近衛家記』は六月までで、『忠房公日記』は三月までである。また、『葉室長順日記』のように、宮内庁書陵部には登録してあるが、本自体が見つからないものもある。